

彙報

● 史學研究會

例會 三月十四日午後一時より法學部第三教室に於て開催、左の兩君の講演あり來會者約五十名午後五時閉會す。

支那大運河の地理學的考察 文學士 藤田元春君

先づ運河に關する支那の書籍の汗牛充棟で、行水金鑑に集めた丈けでも七十卷あり、曆代の河渠志も頗る大部であるこゝより大運河として元代に開かれた北京、杭州間の運河の變遷及地理的事情の考察に入り山東運河備覽、揚州水道記、元史明史の河渠志大清會典を始めマルコポーロ、二卷、マカートニー・エリアスなご外人の旅行記、朝鮮の崔溥の漂海錄、吳錫麒の還京日記、南歸記、張潛山の舟行記、李釣の轉漕記等、實際に通行した人の手記を參考して通惠河の起源を、其の水準の差に對する閘牘の説明から、白河及御河の航路を、臨清より清口に至る山東運河、即會通河の水準を落差及其の水源の説明、及黄河と運

輸出入等を明にせるを記さなければならぬ。地方誌に關しては「カリフォルニア州の地理概要」(渡邊萬次郎、地理教育)「地文及び人文地理學上より觀たる九州西北部」(小川琢治、地球)等が見るべく探險記旅行記中地理に關係あるものには「北樺太シユミツド半島探檢記」(横山次郎、地球)「樺太アイノに關する人類學的探險紀行」(清野謙次、同誌)「臺灣見聞記」(板塚武雄、歴史地理)「山東省内地學巡見記」(渡邊久吉、地學雜誌)「北樺太紀行」(内田惠太郎、科學知識)「南洋の旅」(飯塚啓、同誌)等が見るべきもの、其他「地理教材研究」第四第五輯が刊行せられて地理學界の一方面を賑はし統計時報第七第八號通商公報が刊行せられて産業地理經濟地理方面の研究者を利し朝鮮總督府の「朝鮮」も亦産業地理交通地理地誌方面に貢獻し内務省より「港灣」が發行せられて港灣に關する知識を啓發し京都府南桑田郡誌出で該地方誌を明かにし石川縣發行の「加賀能登社寺舊跡古城址殖産遺跡」及び岩手縣の發行せる「史蹟名勝天然紀念物調査報告」第四冊が地理的研究に好資料を供し「朝鮮部落調査報告」第一冊が共に朝鮮部落地理研究の好參考資料を供せる事を記して昨年地理學界の概觀を終らう。「小牧」

漕ミの關係に及び、更らに揚州水道記によつて淮ミ漕ミの關係、漕ミ江ミの關係をのべ、唐劉晏の轉般の法なるものより、明代直達の法に進歩したこゝ、及過煽の方法について挿圖によつて説明し、結局、運河に必要な水量ミ落差ミの、尤困難な所を通惠河ミ會通河であるこゝ、運河に害を與ふるものを、黄河の氾濫であるミ論ぜられた。

ビスマークの外交に現はれたる軍事的智識

文學士 時野谷常三郎君

ベルンハルデによれば政治家は戰爭の時期を適當に決定する責任はあるが戰爭の實行に容喙するはよろしくないといふ。しかし、若し軍事に關して適切な判断を誤らぬ賢明な外交家ならば戰爭に若干、又は多大の干渉を試みてもいゝと思ふ、例へばビスマルクの如きは其の人である。彼は肉體的にも精神的にも豈に軍人の資質を有し、國家最高の文官でありながら屢々軍事に干渉した。彼自らいつてるやうに彼は軍服に身を固めた文官であつて加ふるに軍事に關し其の當局者以上の理解ミ見識を具へて居り、其爲に軍閥の一派から敬遠され不利を被つたこゝ

も少くない。彼ビスマークは軍事に如何に通曉して居つたかを見るに例へばキール運河の開鑿、サドワ戰の進撃、巴里砲撃の可否等の問題に於て彼は軍閥の反對あるにか、はらず、極力其の主張を貫徹したが其の結果、若々實效が擧り彼の遠見遠識を立證するにあらざるはなしこ詳細に講述せられた。

●讀史會

例會 一月三十日午後六時半より學生集會場にて開催
參會者三浦教授外二十名、左記講演ありて十時散會す。

維新改革の思想的背景

徳重淺吉君

先づ維新改革の根本精神を論じて、尊王論の必ずしも斥霸論にあらざりしこゝを辯じ、維新改革の根本原因は對外問題にしてこれにより國民的感情の喚起せられたるを述べ、更に明治維新は私的關係の封建制度が公的關係に推移せるものにして、從來の對人關係のものが對國家關係に化成せられたるものなるを説き、最後に幕府の崩壞は必然的現象にして維新は實に社會組織ミ生活の實際ミの要求に依りて成れるミ結論す。

明治大帝御幼時の御疾患に就て

醫學士 三宅宗雄君

祖先以來累代京都にありて妙法院門主に仕へ醫を業せられし家系より説き始めて嘉永六年先帝御重患に渡らせられしき會祖父宗仙氏が中山殿に召されて拜診せし當時の事情を其關係文書及び新に發見せられたる中山局より賜れる白銀の包紙等を示して語る。

永井尙長に就て

文學士 加藤鐵三郎君

先づ將軍家綱の法要を増上寺にて執行せるき尙長が内藤和泉守のために斬られ和泉守亦自刃に及べる事件に就て述べ次に尙長が城主たりし宮津の地に、文化的施設をなし大いに治績を挙げたるが就中尙長の編せるものにして傳へらるる永井府誌は宮津府誌の魁をなせるものにして漱玉亭の創建にも特筆すべきものなることを説き更に増上寺刃傷事件については天和の武家滅亡記に記せる所を挙げ、窓のすさび、夕夢の記に参照し最後に大名が公開の席上に於ける刃傷こそそれに對する當局の所置に就て批判論述せられたり。

例會 二月二十七日午後六時半より學生集會場にて開

催、參會者三浦教授、中村講師外十五名、左記講演ありて十時散會す。

封建制度の崩壞

山本道男君

先づ公武合體論に對する薩長の意見の相違を示し公武合體論と王政復古との關係を説き、次で對外思想がいかに吾政治上に影響せしやに論及し、對外思想を(一)攘夷思想、(二)鎖國を豫定したる開國思想、(三)純粹の開國思想の三つに分類して其各に就ての特色を述べ、最後に明治四年の廢藩置縣となりて完全に封建制度の崩壞を見るにいたれりこ結ぶ。

大御所時代とは如何なる時代か

小橋淺雄君

ここに謂ふ大御所時代とは天明四年より天保十二年にいたる五十四年即ち定信の改革より忠邦の改革に至る間のこみにして、その時代の社會相の考察の客體を國家、宗教、文藝に三大區分をなし、更に國家の内容を政治、法律、經濟、財政、道德、教育、社會、風俗、文藝を學術、文學、藝術に小分科しこれらの文化要素は單個のものとして獨立せ

るものにあらずして相互關係あるものなり。一々事實に徴して時代精神を觀測す。

誤られ易き歴史の實例 文學博士 三浦周行君

ある時代の歴史上の事象を考察するに當り、當時の史料若しくは當時を去る遠からざる時代のものに見えたりて之を妄信、速斷するの危險なることより、其最も誤られ易きは女性の關係せる史實の真相なることを述べられ、古來のこれに關する二三の例證法制等を説かれ、次に其適切な例證として、東山義政時代の今參局に就て、從來依據せられたる當時の史料が事實を誤傳せること、及後人の其誤傳を妄信せることを摘發して、史實の探究に冷靜なる批判の緊要なることを痛論せられたり。内容は近く本誌に掲載の筈なるを以て略す。

●支那學界

例會 一月廿六日(木)午後六時より文學部第六教室に於いて開催す。出席者三十餘名、當日の講演左の如し。

一、京綏沿線

藤田元春君

京綏線は支那人の力にて敷設せられたる注意すべきも

のたるのみならず、その沿線には幾多人目を惹くに足るべきものありて、特に萬里の長城に就いて聽者の旅情をそゝられたり。

一、支那社會の無政府狀態ニ儒家の徳治説

小島祐馬君

支那に於ける政教の理想なる徳治主義は、究極する所無政府狀態の實現にあり、支那の社會は事實この無政府狀態にて安定する所以を説かれたり。

講演後矢野博士は、余も亦支那社會の固定性(Stability)を感ずるものなるが、その論旨殆ど全く小島君の所説ニ符節を合するが如きものあり、かゝる考が略々時を齊しうして、兩人の腦裡に浮び來れるは一奇といふべし。述べられたり。

歡迎兼豫餞會

今回歸朝せられたる内藤今西兩博士

歡迎會並びに卒業生豫餞會を催す。二月十二日(木)午後四時、京大學生集會所にて記念の撮影を了し、南室にて會食に移る。會するもの四十餘名に垂んじす。デザートコースに入るや、先づ幹事より挨拶あり。兩博士交々立ちて感

想を談じ、卒業生總代大浦君亦答辭を陳ぶ。内藤博士曰く佛獨英の東洋學者は、近來邦人の研究に注意を拂ひ、彼等の堆き机上には、我が「支那學」を備へざるなし、これ邦人の雜誌として、彼等の机上を飾る唯一のものなり、吾人等てか奮勵、以てこれが繼續發展を期せざるべけむやと、大に會員を激勵せられたり。今西博士は、北京及びその郊外が、四季を通じて可ならざるなく、風物と共に人間味の掬するに堪へたるを語り、これを泰西のそれらと比較して曰く、西洋の建物は、大は即ち大なりと雖も、これ長屋を縦にしたるだけにて、幾多の不自然これより生ずと、大に氣焰を擧げられたり。

● 古文書時代鑑の發行

東京帝國大學史料編纂部では、歴史知識普及の目的で、今度各時代の代表たるべき古文書筆蹟の類を輯めて玻璃版に付し「古文書時代鑑」と題して發行すると、なつた。

それには現存する我國最古の文字である御物の聖徳太子御筆の法華義疏を始として、御歴代の深く御精神をこめ給ひし宸翰凡二十點、公家では近衛公爵家所藏の藤原道

長自筆の日記以下の筆蹟數十點、武家では平清盛、源頼朝以下數十人、降つては幕末志士の筆蹟、最近空海を初めとして、名僧數十人の遺墨、その他惺齋、道春、契沖、宣長等の學者から近松、馬琴等の戯曲小説家の筆蹟に至るまで、殆き遺憾なきまでに輯められて居るものことである。從來この種の玉石混淆の出版物は違つて充分精選を経たものであるから一本を座右に備へて置けば、何人でも其筆蹟を通じて歴史上あらゆる方面で知名の人士と接觸するこゝが出来る上にこれを標準として或程度までは古文書古筆蹟の鑑定も出来るであらう。因に本書は上下二冊に分れ、各冊四ツ切り寫真玻璃版百二十枚宛用紙は手漉きの局紙を用ひ定價上下共各二十圓、希望者は同掛へ申込めばよい。

會報

●會員動靜

■入會

大阪外國語學校

東京市外高田雜司ヶ谷字龜原五七

(右紹介者 羽田亨氏)

京都市室町頭 大谷大學内

(右紹介者 玉井是博氏)

東京市外巢鴨町一四七〇、謙和舍

東京市外下戸塚町五二〇、信愛學舍内

東京市小石川區宮下町二七

東京市本郷區駒込富士前町七四、内川寮

(右紹介者 津田左右吉氏)

東京市外西巢鴨町池袋九七〇

(紹介者 平泉澄氏)

京都府乙訓郡大山崎村字山崎

京都府立第三中學校

(右紹介者 仁科貞人氏)

奈良縣廳

ネブスキー氏

須賀虎松氏

土山文夫氏

武田孫一郎氏

洪 淳 赫氏

深瀬春一氏

乙 部 茂氏

廣野三郎氏

青 木 護氏

岩 見 護氏

稻葉賢次氏

●寄贈交換圖書

文化人類學(西村真次著)

早稻田大學出版部

朝鮮史講座 一五

朝 鮮 史 學 會

Young Pao (通報) Vol. 23, No. 3.

Paul Pelliot

東洋學報 一四の三・四

東洋協會學術調查部

佛教研究 五の三・四

大谷大學佛教研究會

國學院雜誌 三〇の一二・三一の一

國 學 院 大 學

龍谷大學論叢 二五九

龍谷大學論叢社

觀想 一二・一

觀 想 發 行 所

人類學雜誌 四〇の二・二

東京人類學會

史學雜誌 二五の一二・三六の一

史 學 會

歷史地理 四四の六

日本學術普及會

伊豫史談 三九・四〇

伊 豫 史 談 會

密宗學報 一三九

眞言宗京都大學而眞會

奈良市押上町六〇

岸 熊吉氏

木内重四郎氏

阿部秀助氏

(右紹介者 上田三平氏)

退

會

香川縣小豆郡草壁町下村一二三

慈氏周忍氏

齋藤遊雲氏

高杉權藏氏

坪井忠彦氏

(右紹介者 高橋欣二氏)

京都市室町頭、大谷大學内

諏訪義讓氏

前川英三郎氏

弘田長氏

京都市紫野東門前町五二、井上

中島正賢氏

(右紹介者 神田喜一郎氏)

東京府下東大久保一〇二

小長谷達吉氏

(右紹介者 植村清二氏)

京都府下龜岡町

村上 勇氏

京都帝國大學文學部史學科學生

原 弘二郎氏

同

岸本準二氏

岐阜縣惠那郡上村、上村高等小學校

吉村孫六氏

(右紹介者 島田貞彦氏)

宮崎縣立宮崎中學校

岩見藤雄氏

(右紹介者 清原貞雄氏)

逝 去

左記會員の逝去を悼む